勝山おもしろ読本　第三集

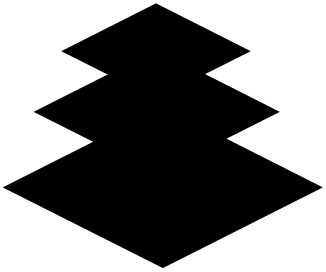
勝山城を築いた柴田一族の生涯と勝山城主列伝

附　小笠原家と長柄の話

発行　勝山地区エコ推進協議会

勝山城を築いた
柴田一族の生涯と
勝山城主列伝

附　小笠原家と長柄の話



小笠原家家紋
三蓋菱（王子紋）

柴田家家紋
二つ雁金

はじめに

今回、編集しました勝山おもしろ読本第三集では、勝山城を築いた柴田勝安について、その生涯をたどることにしました。

江戸時代の勝山の歴史については、明治までの百七十年余り、八代続いた小笠原時代がどうしても中心となりますが、天下統一の戦国時代、織田信長の家臣である柴田勝家の命により勝山の一向一揆を平定し勝山城を築き、現代の勝山の祖である柴田勝安、そしてその義父　監物義宣についてはあまり知られてはおりません。

確かに、勝安研究の上で、両者とも勝山での生涯がわずか十年足らずで資料がほとんどなく、柴田一族すら詳しいことは分かりません。

わずかに残る勝安文書だけが頼りですが、私なりに各地で調べ、独断と偏見でおもしろ読本として編集したまでで、四百年余り昔の歴史が変わることはなく、また変える気もありません。

附記として歴代城主や小笠原家に関することを記しましたが、これらはすでに各歴史家の先生の著書に詳しく書かれており、私の出る幕ではありません。ただ、長柄の槍と長柄節について私なりに調査したことを書き加えただけであります。

眠気覚ましの笑本として読んでいただければ幸いです。

編集にあたり、勝山地区エコ推進協議会やご助言いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

下町の歴史家

丸屋　仁志　記

目　次

一・加賀、越前の一揆討伐　1
（一）一揆軍七山家の防戦　1
（二）柴田監物、谷にて戦死　3
（三）柴田勝安（勝政）、袋田村に入る　5
（四）袋田村に勝山城築城　7
（五）義宣寺の建立　8
二・勝山城主　柴田勝安　外伝　16
（一）勝安の生いたち　16
（二）勝政　賤ヶ岳にて戦死　20
（三）瀬戸内海への亡命　21
三・子孫　勝重伝説　26
四・勝山藩　江戸時代の城主余話　28
（一）成田重政から松平直基まで　28
（二）勝山藩小笠原家の入封　30
（附）小笠原家と長柄の話　43

一・加賀、越前の一揆討伐

（一）一揆軍七山家の防戦

天正二年、織田信長は、家臣である柴田勝家（修理亮）を加賀越前の一揆残党を征伐すべく北の庄に封じ、合わせて宿敵　越後の将、上杉氏を制禁するためでもあった。

翌年、柴田勝家は、谷城に立て籠もる一向一揆を征伐させんと、勝家の一族と言われる柴田監物義宣を北袋（勝山）に配した。

同五年、監物は、村岡山（御立山）を本陣として砦を築き、一揆軍の七山家（現在の北谷町…杉山、中野俣、六呂師、河合、木根橋、谷、小原）を攻めるも、

七山家は防戦し容易には屈しなかった。

ご存知のとおり、この地籍は谷峠を越えれば加賀の国である。一向一揆軍は、北は越中より南は越前に及ぶ一大勢力であり、僧侶や士豪浪士を含む民衆軍であった。「百姓の持ちたる国」としてその勢力も強かったのである。

（二）柴田　監物、谷にて戦死

一揆討伐より二年後の天正五年十一月、監物は、不幸にも戦いの半ばで、谷村河合にて一揆軍の百姓に討たれ、戦死したのである。

監物の殺された場所を、人々は「殿切り原」と呼んで今も河合の国道脇の奥に高さ五十九センチメートルの五輪塔が建っている。おそらく監物が討たれた何年か後に、村人が供養のために建てたものであろう。

このようにして、わずか二年の勝山での生涯であるため、監物の生い立ちについての記録はほとんどなく、年齢も生国も全て不明のままであり、証明するものは何も残っていない。

←谷に残る監物庙

↑「柴田一族勝山主人諱名監物
名義宣天正初丑五比地出陣
中鉄砲　云々…」

（三） 柴田 勝安（勝政）、袋田村に入る

監物の死後、天正六年、北の庄城主 柴田勝家は、自分の養子とした佐久間一族の勝政（佐久間盛次の三男）を再び監物の養子として北袋に送り、監物の弔い合戦として七山家の一揆軍討伐に充てた。

勝安は、村岡山を居城として七山家の谷城を激しく攻め、同六年の春、遂に谷城の一揆軍を滅ぼしたのである。谷城の跡は、現在、伊良神社となっている。

勝家は、勝安をそのまま北袋に据え置き、北袋の領地を与え、勝安は三万五千石の領主となった。

同七年、勝安は牛首十六ケ所を平定し、北袋とともに勝安の領地として与えられたことは周知のところである。

↑ 谷城跡　伊良神社の境内
谷のはやし込みの舞台である。

↑ 市街から望む村岡山（手前）

（四）袋田村に勝山城築城

この間、勝安は、兄の佐久間　盛政とともに加賀・能登一揆討伐のために幾度となく戦場へ出陣している。

天正八年、勝安は村岡山城より北袋に入り、袋田村七里壁の上に城を築き、その地名から袋田城と呼んでいたが、一揆軍が村岡山を勝利の山として「勝ち山」と呼んだ縁起を担ぎ、袋田城を「勝山城」と改めた。これが、「勝山」という地名の発祥の由来である。

一説には、最初、監物の館があったと言われる現在の義宣寺の場所に城を築き、富田城と呼んでいたとも伝えられている。今も小さな石垣跡（公園近く）が見られ面影を残している。

「富田」とは字名であって、この辺りは田の富裕な土地であったところから富田と呼ばれ、大蓮寺川に架かる義宣寺橋も以前は富田橋と呼ばれていた。昭和時代、七里壁の上の境内登り口には、杉の木が生い茂る森のようであったが、近年伐採された。

（五）義宣寺の建立

勝安は、養父　監物義宣の菩提を弔うために、富田城跡に寺を建てて、義宣の名から義宣寺と名付けた。

寺は曹洞宗で、山号を白麓山といい、開山は永平寺十九世　祚玖和尚で、寺領二十石を与えられた勝山で最初の寺院である。

柴田一族が滅んで廃寺となる運命のこの寺が、再興され、豊臣・徳川時代にも栄えてきたことは、やはり柴田一族の威光が強かった証明であろう。

現在の寺は、慶応年間の大火の後、明治十六年に再建されたものと言われている。今も寺には、北の庄城の鬼瓦と同じ笏谷石の鬼瓦が二基、保管されている。また、寺ゆかりの部屋や、庭園と古笈庵、土蔵、古い鐘楼門などが残されている。

また、昔から「勝山十景」のひとつである「義宣の晩鐘」と呼ばれる鐘は、現在も朝夕、町中に鐘の音が鳴り響いている。

義宣寺本堂境内の前に建つ義宣と勝成の連名の墓がある。高さ一五〇センチメートルで、墓石には、右に「傑柴田監物義宣」、左に「柴田三左衛門勝成」と彫られ、反対側には「義宣寺殿傑山玄英大居士・勝成院殿蘭香宗英大居士」、

神儀として法名が彫られている。この墓を建てたと伝えられている柴田　頼母という人物についても全く不明である。

本堂には墓石と同じ位牌が安置されており、これもまた連名で書かれている。

←↓ 墓碑と位牌

↑ 義宣寺 登り口（昭和時代）

↑ 義宣寺 本堂

↑ 義宣寺 本堂正面

→ 御内陣

← ↓ 創建時代のものと思われる鬼瓦

← 義宣寺境内の古笈庵

佐久間勝政家系図　佐久間一族

佐久間盛次
盛重の子　久六郎
織田信長　武将

未森の方（未守）
柴田勝家の妹

- **盛政**
  - 尾山城主
  - 賤ケ岳にて戦死　二十九歳
- **安政**
  - 紀伊保田左介知宗の養子
  - 関ケ原合戦にて東軍
  - 飯山城主　三万石
- **勝政**
  - 三左ヱ門勝政　勝家の養子
  - 勝山城主　三万五千石
  - 賤ケ岳にて戦死　二十七歳
- **勝之**
  - 佐々成政の養子
  - 北条氏家臣　六十七歳
  - 関ケ原合戦にて東軍
  - 江州高畠　一万八千石
- **勝友**
  - 関ケ原の合戦にて東軍
  - 子孫は徳川の旗本　五千石

柴田勝安（勝政）家系図

柴田勝家
修理亮
北の庄城主

お市の方
信長の妹
最初浅井長政の妻

柴田監物
勝家の一族
一揆討伐大将

養子

勝久

勝豊
丸岡城・長浜城城主

勝政
柴田監物の養子となり
勝山へ入封。
勝山城城主　三万五千石
三左ヱ門勝安を名乗る

養子

勝重
勝安の一子（伝）
日野根家　仙川二千五百石

二・勝山城主　柴田　勝安　外伝

（一）　勝安の生いたち

勝山に城を築いた最初の男、柴田三左ヱ門勝政（勝安）は織田信長の家臣佐久間盛次の五人兄弟の三男として、元治元年、尾張名古屋で生まれた。母は北の庄城主　柴田勝家の妹である末守の方であり、勝家の甥にあたり、兄　柴田盛政は加賀尾山城（金沢城）の城主で、兄弟とも最後まで勝家に仕えた。

戦国時代の武将　佐久間一族に生まれ、幼年時代は信長の小姓として仕え、武士としての初陣は十四歳の時、信長比叡山焼き討ちの時であるという。

父母の死後、十二歳で子どものなかった勝家に引き取られ養子となり、柴田姓

を名乗り、その後一揆討伐のため柴田一族である柴田監物の死後、越前袋田村に入封し、三左ヱ門勝安と改名、伊賀守と称した。

勝政と勝安は同一人物であるが、勝山では「勝安」と呼ぶのが一般的である。

畔川道場の文書には、「三左ヱ門勝安」と署名された花押が書かれており、また同道場に残る位牌にも「三左ヱ門勝安」と印されているが、位牌については、年代的に疑問が残る。

畔川村夫役免除の文書の中のひとつに、天正十一年三月二十日と記されたものがあるが、この時期、勝安は賤ヶ岳の行市山に監視隊として出陣しており、戦の最中に送ったものと思われ、まことに不思議であるが、勝安最後の貴重な書状である。また、前章にも書いたとおり義宣寺の墓石には「勝成」と印されている。

↑　勝安の畔川文書

↑　天正十一年三月十日日付である

畔川の勝安の位牌は、天正十八年四月廿一日に死亡し、その百九十六年後の天明六年に作られたという。しかし、歴史上は、勝安は天正十一年四月二十一日に賤ヶ岳で戦死と伝えられている。

（二）勝政　賤ヶ岳にて戦死

天正十一年、豊臣秀吉と柴田勝家の戦いである賤ヶ岳の合戦（柳ヶ瀬の役）では、兄　盛政軍の後衛司令官の大将として勝家軍に参加し、三千の兵をともに奮闘し、秀吉軍を苦しめた。

しかしながら、戦は秀吉軍の勝利となり、勝家は北の庄城にて自刃し、兄　盛政は逃亡の途中捕えられ処刑されたという。

勝政もわずか二十七歳の若さで賤ヶ岳の雫と散ったのである。

法名　勝成院殿蘭香宗英大居士

（三）瀬戸内海への亡命

ただ、勝政が誰に討たれたのかも不明であり、その遺体を確認した記録もないため、勝政逃亡説が事実として様々な憶測で語られている。

一説には賤ヶ岳より越前に逃げ戻り、大野の金森氏に匿われたという説、もう一説には瀬戸内海を渡り香川県への逃避説、そして徳島県美馬郡への亡命説がある。

現に徳島県美馬郡貞光町には勝政の墓所が存在しているのは確かである。

平成十五年八月、滝川裕司氏、和田雅弘氏、多田治門氏と四名で徳島を旅行した際、袖兎建つでも有名な貞光町に立ち寄り、当町の学芸員　山本忠氏より資料をいただき見学した。

墓のある江の脇薬師堂への上り口には柴田勝政公墓所と彫られた二メートルほどの石碑が建っている。

墓地は上り口から線路を渡り町を見下ろす高台にあって小さなお堂（薬師堂）が一軒建っており、その中央に勝政の墓であろうと思われる高さ二～二・二五メートル程の大きな五輪塔が建てられ、地輪には寛永十八年（一六四一年）三月二十一日の年号と勝政の法名らしき宗善霊位と彫られている。

墓の左隅の副碑には「五輪塔伝薬師庵正面本性柴田三左ヱ門勝政　通称柴野忠三郎宗善天文二十年尾張生越前転天正十一年貞光邑来住寛永十八年三月二十一日逝・・・・と刻まれている。

山本忠氏の説明によれば、賤ヶ岳にて敗れた勝政は、一度は越前に退くも秀

吉軍に国を追われ、柴野忠三郎と名を変えて何らかの伝を頼りに貞光村に転居してきたのだという。

長子　久八、次子　彦次郎を生み、本家は世々柴野家を名乗り、二人の子どもは明暦の棟付には本家格である柴野に別記されている。

このことは、平成十六年に発行された楠戸義昭著の「戦国佐久間一族」の本にも書かれている。

明治十一年に柴野姓を改め本姓の柴田姓に復したと記録に残されており、本家格の柴田章一家は残念ながらすでに他所へ移転しており会って話すことはできなかった。

戦国武将の逃亡説はよく見られることで、何の根拠もない説です。今さら史実

を覆すこともなく創作話として書き終えておきます。

→ 子孫が建てた柴田勝政公墓所の碑
（高さ約二メートル）

← 勝政の五輪塔
（高さ約二・二五メートル）
左側に副碑が見られる

← 副碑
勝政が貞光村へ渡来した由来　天正四年七月

三・子孫　勝重伝説

史実として伝えられている勝政の子、三左ヱ門勝重は、天正七年（勝政が城を築いた年）の生まれで、父の死後、わずか三歳で越前（勝山？）を逃れ、外祖父の日野根家（母の里か？）にて養われ成人し、慶長四年、二十歳で徳川家康に仕え、関ヶ原の戦功によって武蔵国多摩郡上仙川と中仙川の二村と入間郡藤沢村内で二千五百二十石余りを与えられている。

五十二歳で病死し、墓は調布市深大寺近くの春清寺にあり、柴田勝重公菩提所の石碑が建ち宝篋印塔があるという。

勝重が埋めたとされる勝家の兜塚が近くの勝渕神社にあるらしいが、勝重から

みれば勝家よりも、父　勝政の菩提を弔うためのものではないかと思われる。

これが事実であれば、勝重は勝政の実子であり、勝山城主柴田家の子孫であることは間違いないが、これも伝説としてすべて昔のことである。

四・勝山藩　江戸時代の城主余話

（一）成田重政から松平直基まで

柴田勝安の勝山城は亡び、勝山藩は北の庄直轄領となり、豊臣の家臣であった丹波長秀が北の庄城主となり勝山には成田弥左ヱ門重政が城代として入封したが、慶長年間、関ヶ原の戦の頃は不明で一時廃城となったようで、後に長谷川秀一氏が入り、また大野郡八万石と合わせて青木一矩が大野勝山を兼領した。

越前に徳川家康の二男　松平（結城）秀康が封じられ、慶長六年その家臣である林長門守が城代として勝山に配されたが、慶長十八年追放され、その後矢

野伝左ヱ門、水戸三七などが代官として配された。

この頃一国一城令が出され勝山城は取り壊されたのである。

寛永元年、北の庄には秀康の二男　忠昌が城主として入り、福井と改め、勝山には秀康の五男　直基が入り、同十二年六男の直良が城主として入封している。

正保元年より一時廃城となり福井藩の預りとなり、貞享三年、再び天領となり、勝山城跡に陣屋が建てられ三人の代官が配置された。

（二）勝山藩小笠原家の入封

元禄から明治まで

この間百年余り勝山城の主人は目まぐるしく交代したが、元禄四年（一六九一）美濃高須より小笠原貞信が勝山藩小笠原家初代藩主として二万二千七百石のお殿様として入封したのである。

これより八代長守公まで百七十年間余り、小笠原時代は戦もなく明治維新まで続いた。

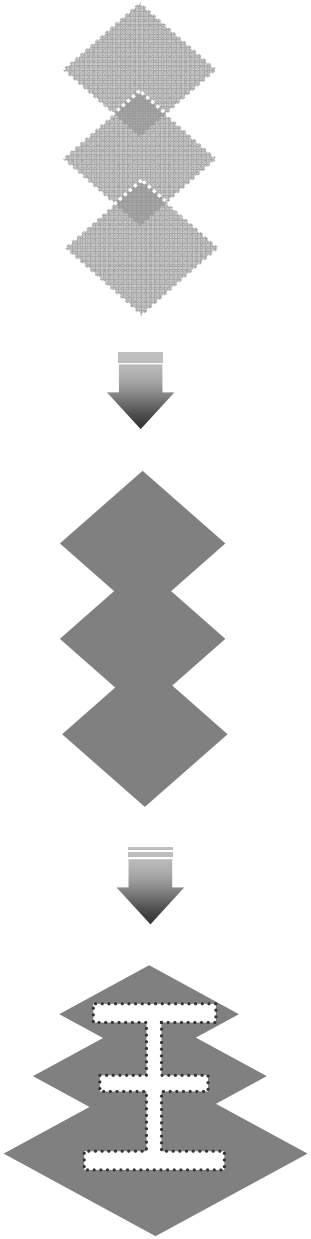
小笠原家の歴史については述べるまでもなく、また勝山城に関しては増田公輔先生が「越前勝山城」に詳しく書かれておられます。

小笠原家の家紋は甲斐小笠原長清の紋章で、時の天皇より賜れたと伝えら

れ、王の字を以って家紋とし王字紋ともいう。また一般的には菱を三枚重ねた三蓋菱が小笠原家の家紋となっている。

この三蓋菱の紋は、成器堂の紋章としても使用され、以後、勝山成器校の校章となっており、現在でも旧町では各団体旗やマークにも利用されている。

三蓋菱とは、三の菱形を重ねて、中の重なった線を取り除いたもので下の菱形の大きいのは王の字を表している。



小笠原家ゆかりの寺　菩提寺　開善寺

小笠原貞信入封後から明治まで、八代百七十年余り続いた歴史の中で初代貞信が小笠原家の菩提寺である開善寺を沢の地に建立した。

城東には八幡神社、神宮寺（真言宗）を建立し、八幡神社には小笠原貞宗を祭神として祀られている（現在は神明神社に合祀）

開善寺の寺領は百石である。

元禄四年に建立された開善寺は、開祖は勅諡大鑑禅師（支那の人）で臨済宗妙心寺派で山号は畳秀山と呼ばれている。

明治の大火で焼失したが、現在の山門（鐘楼）は大火で焼け残った柱などで明治三十五年頃に再建されたもので、二階建ての立派な山門で他に類がない。寺には小笠原家の資料や寺宝もありましたが、歴代の住職が持ち去ったと聞いている。

先代の寺田陽岳様も近年亡くなられ、現在は廃寺同様となり文化財の保存にも困難であります。

山門をくぐり右に折れて境内奥に進むと墓地があり、その中央に小笠原家歴代藩主の墓廟があり、昭和五十年に市の文化財に指定された。二万七千石の大名らしく規模は小さいがよく整った清楚な墓で、全てが笏谷石で造られている。

周りには藩士　鈴木定七の墓や檀家の墓があるが、檀家もほとんどいなくなった。

その頃のものと思われる舟型如意輪仏の石碑もあり時代を偲ばせます。

↑　開善寺　山門(鐘楼)

↑　小笠原家歴代の墓

→　開善寺　本堂

←　開善寺に伝わる　遠光長清父子坐像画

大蓮寺と国泰寺

小笠原藩ゆかりの寺としては、沢区の一 本義久保酒造の前に建つ大蓮寺、元町二丁目の国泰寺などが知られている。

大蓮寺は山号を品量山と呼び、日蓮宗であるが、松平直基公の母 品量院殿の帰依により、寛文四年に建立された寺で、直基寄進の「三宝荒神」や小笠原藩主の寄進した「鬼子母尊神七面尊神」が祀られ、後に藩主 長守より菩提寺に准じられ、林毛川や重臣の墓が祀られている。

↑ 大蓮寺 本堂

↑ 林 毛川 一族の墓

また国泰寺はもとは平泉寺未南教坊と称して後に円福山国泰寺となり黄檗宗であり、小笠原初代貞信公より宝鏡を賜り、さらに宇堂を築造している寺である。

境内には芭蕉の一句「酔うて寝む撫子咲る石の上」のなでしこ塚があり、その後に比良野帰雲坊の句「明け残る星の光や秋の雲」と刻まれた三角形の句碑がある。

この塚は帰雲坊（守梅仙）が明治三十一年八十才の時に再建したものである。

↑ 国泰寺 本堂

← 芭蕉塚

小笠原余談　入封百年祭

寛政二年、藩主　長教（六代）の時、貞信が入封以来百年を祝して正月六日より二十一日まで祝賀行事が盛大に行われた。

郡町・袋田・後町・長渕・沢の各町の町庄屋など世話人総出で接待し、また催物としては各町で笛や太鼓、三味線などのお囃子屋台を出して、浄瑠璃や三番雙などが披露され、また仮装行列も出され、義経や小野道風、曽我兄弟、八幡太郎など十歳前後の子どもが扮して、沢から郡までの大通りを練り歩いた。杖持ちや仆鉾持ちなども役が決められていた。

なお、造り物宿では造り物が飾られ、郡町では神宮皇后、袋田は宝船、後町では万歳楽、長渕は象、沢町は祢り子、その他囃子方による狂言屋台が出され

ている。

藩主で一番長かったのは信房公の三十四年で七代長貴は幕府の要職若年寄を勤めており、九代長育は東宮侍従に命じられている。

小笠原入封以後、百七十年余り続いた藩政も、遂に明治を迎え廃藩置県となり、その時代は終わったのである。

勝政が築いた勝山城、一国一城令により、天守台だけを残した勝山城跡も昭和四十二年には取り壊され城下町の面影が一新された。

当時を語るものはほとんどなく、明治からも百年以上過ぎ、平成の時代となった今では市民会館前に残る明治二十二年の城址碑だけが昔を偲ばせている。

終

勝山城址之碑

（附）　小笠原家と長柄の話

先にも述べたように小笠原家の祖は甲斐源氏の嫡流にてもともと格式の高い家格であった。

長柄の槍は十万石の大名だけが使用することを許されたものであるという。

藩主の中に碁を能くする方があり、江戸の詰めの時には将軍の碁の相手をされ、ある時碁の後の酒の席で将軍より御墨付きが下された。翌日家老が御墨付きを持って老中に御礼言上に行けば御加増となるが、いかなる訳かそのままになった。その後将軍より「小笠原は無欲じゃ」と申され、それに代わり特に長柄の槍を許され、先にも記したが、参勤交代の道中には二万三千石の大名である勝山藩に十万石の格式ある長柄の槍を使用することを許されたと伝えられている。

長柄節はこの名誉を領民が讃えて作られた読み人知らずの民謡である。

この盆唄の始まりは昔の念仏踊りともまた九州の馬渡島の酒盛祝唄で能登の港に伝わってきて能登では馬渡節として唄われた唄とも言われている。これがいつしか勝山に伝わり長柄節となったと思われる。

長柄踊りは藩時代に盛んに踊られた盆踊りが始まりで、明治に入り四月三日の太政宮祭には「札の辻」から「本町見付け」まで川を中に挟んで徹夜で踊り抜いたそうで、この踊りの長短で秋の豊作を予想したという。唄も踊りもともに上品であり、念仏踊りの流れで実にゆったりとして格式高い伝統民芸として後世に伝えたい文化財である。

囃子文句の「オリカケトウロ」とは新盆の家々の軒先に掛け精霊を迎える「折

懸燈籠」のことである（写真参照）

元唄では、「盆様盆さま、お迎え申す、軒に燈籠掛けておく、トウロやトウロ、オリカケトウロ、ヨーイヨーイ　ヨイヤサ」と囃されている。

長柄は空につかえます
ひくい御門の槍のさや
トウロやトウロ　オリカケトウロ
ササヨイヨイヨイ　ヨイヤーサー

← 折懸灯篭

↑　長柄行列（本町通り）

↑　長柄踊り

昭和時代の終わり頃までは長柄節とその踊りは祝宴の座敷において芸者さん等によって披露され縁起のよい余興として喜ばれ、特に旅からの客から喝采を浴びた。

勝山俄、左義長太鼓、作り物とともに勝山を代表する芸能文化であって、長柄行列、長柄踊りとも歴史伝承として市など正式衣装を揃え夏祭りなどで復活してほしいものである。

なお、両方とも格式のたかいものであるゆえ決して他地区の真似事にならぬよう指導してほしいと願います。

勝山市文化財保護委員　丸屋　仁志

参考文献

勝山市史
福井県の歴史
福井県大野郡誌
第九師管古戦史
徳島県貞光町史
勝山市史編纂室資料

取材地　徳島県美馬郡貞光町
　　勝山市内

勝山おもしろ読本第三集

勝山城を築いた柴田一族の生涯と
勝山城主列伝

発　　行　勝山地区エコ推進協議会
文と写真　丸屋 仁志
　　勝山市文化財保護委員
編集・印刷　勝山公民館
発　行　日　平成二十一年三月